The Notes of Paintings and Calligraphic Works by Bokudou Inukai ・ Zhenyu Luo ・ Uzan Nagao in the Otsuma Women's University Collection

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6021

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第四十七号、平成二十七（二〇一五）年三月

大妻女子大学蔵「犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖」について

松村茂樹

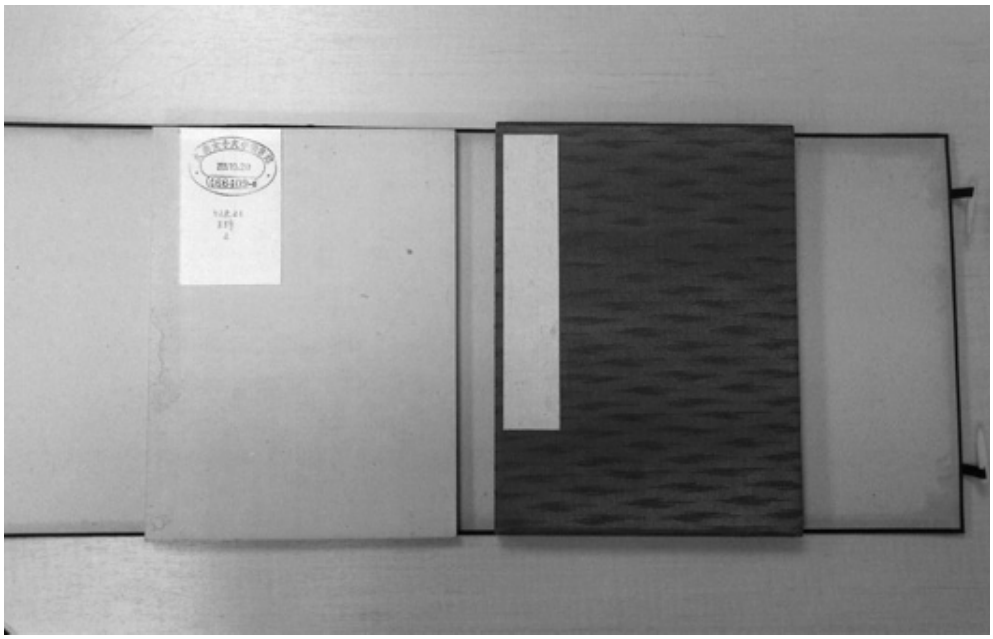
【キーワード】犬養木堂、書画帖、羅振玉、長尾雨山、書画文墨趣味ネットワーク

はじめに

大妻女子大学蔵「犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖」は、第二十九代首相をつとめた犬養木堂（一八五五―一九三二）が、折帖二冊（共に見開き縦約二十四センチメートル、横約三十六センチメートル）に自ら題字を認めた上で、文墨の交わりを有する知友に揮毫を求めた書画帖である。

そこでは、羅振玉（一八六六―一九四〇）、柚木玉邨（一八六五―一九四三）、長尾雨山（一八六四―一九四二）、小栗秋堂（生卒年未詳）、黄以霖（一八五七―一九三二）、宗星石（一八六七―一九二三）、山本梅荘（一八四六―一九二一）、滑川澹如（一八六八―一九三六）、榊原鐵硯（一八五五―一九三七）という面々が筆を揮っている。これらは、いわば木堂の書画文墨趣味のネットワークに連なる、重要な人々である。

本稿では、この二冊の書画帖に揮毫されているすべての書画を紹介し、その分析を行いたい。このことにより、木堂の書画文墨趣味のネットワークの構成、およびその果たした役割を明らかにすることができよう。



前述のように、この書画帖は、折帖二冊からなり、一帙に収められている。一冊には表紙がなく、もう一冊には布張りの表紙がある。ここでは、とりあえず、表紙がない方を第一冊とし、ある方を第二冊とする。

一、第一冊（犬養木堂・羅振玉・柚木玉邨・長尾雨山・小栗秋堂・黄以霖）

① 犬養木堂題字「山林大有人」

犬養木堂は、名を毅、字を子遠といい、木堂、宝蘭亭斎主人と号した。備中川入の人。政治家。慶応義塾中退後、報知新聞記者などを経て政界に入り、立憲政友会総裁、第二十九代内閣総理大臣に至ったが、いわゆる五・一五事件の凶弾に倒れた。中国通として知られ、日本に逃れてきた康有為、孫文、蔣介石などをかくまった。また、書画に造詣が深く、講演録『木堂翰墨談』（一九一六、十一、二十七・博文堂合資会社／一九八一、二、二〇復刻・教育書籍）は広く読まれ、その書は高く評価されている。

この題字は、次のようにある。

山林大有人

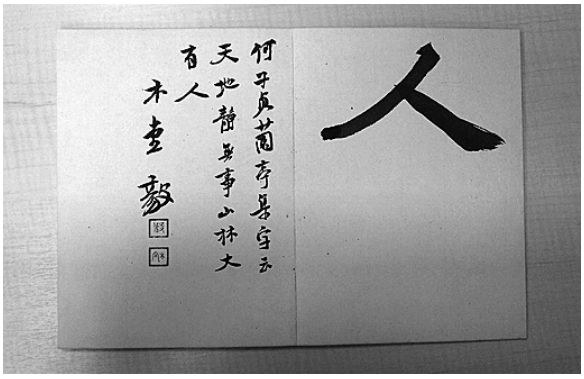
何子貞蘭亭集字云、天地静無事、山林大有人。木堂 毅。

〔山林大にして人有り

何子貞（紹基）が王羲之「蘭亭序」から集字した対聯に、「天地静にして事無く、山林大にして人有り」という。木堂 毅。〕

後の③で紹介する柚木玉邨「墨蘭図」の款書に、「於蘭亭会後一日」とあることから、この木堂の題字は、大正二（一九一三）年四月、京都で行われた蘭亭会（十二・十三日の両日に京都府立図書館楼上で展覧会が開かれ、十三日に南禅寺天授庵で禊祭が行われた）にちなんで、「蘭亭序」から集字した語句を書いたことが窺える。

この蘭亭会は、東晋の永和九（三五三）年癸丑の年、王羲之が「蘭亭序」を書いた蘭亭の雅会が開かれてから一五六〇年後、二十六周目の癸丑の年を記念し、内藤湖南（一八六六―一九三四）らが中心となっ



て開かれた。[1]

この時の展覧目録を見ることができるが、[2]その筆頭にあるのが、犬養木堂蔵「唐荊川旧蔵宋拓定武本蘭亭序」である。これは、「海内第一」といわれた名品で、附せられている長尾雨山の跋によると、壬子（一九一二）の春、当時上海に住んでいた雨山のもとに持ち込まれた明の唐荊川旧蔵のこの帖を、木堂に購入してもらったという。

そして、この第一の名品の所蔵者として、木堂はこの蘭亭会に来ているのである。原田悟朗「木堂先生と博文堂（一）」（『書論』第十号・一九七七、五、三〇・書論編集室 所収）に、以下のようにある。

大正二年が癸丑の歳に当り、内藤湖南先生らが主唱され、京都の東山で蘭亭会を催されました。辛亥革命直後のことで、清朝の遺臣である羅振玉先生、王国維先生が内藤湖南先生、狩野君山先生の御友人ということで、京都に亡命されておられました。そして、大正癸丑の蘭亭会に参加されました。木堂先生は胆石病の後でしたが、御自身として最後の癸丑の蘭亭会というので参加されました。

原田悟朗（一八九三―一九八〇）は、木堂の後援者であった博文堂主人・原田庄左衛門（一八五五―一九三八）の五男で、木堂に最も親しく接した人物の一人である。原田庄左衛門は、会幹の一人として蘭亭会を切り盛りしたが、この開催に合わせ、木堂に懇願して「唐荊川旧蔵宋拓定武本蘭亭序」を博文堂から影印出版している。木堂は、愛蔵品の影印出版にあたり、羅振玉の審定を経たいとして、内藤湖南にこれを送り、羅振玉の篆書題簽、康有為（一八五八―一九二七）・羅振玉・内藤湖南・長尾雨山の跋を得た。[3]

木堂が湖南に「定武蘭亭」を送った際の、大正元（一九一二）年九月一日付書簡（鷲尾義直編纂『犬養木堂書簡集』・一九四〇、一二、一五・人文閣／一九九二、五、一五・岡山県郷土文化財団復刻 所収、以下、木堂の書簡はすべてこれによる）に、

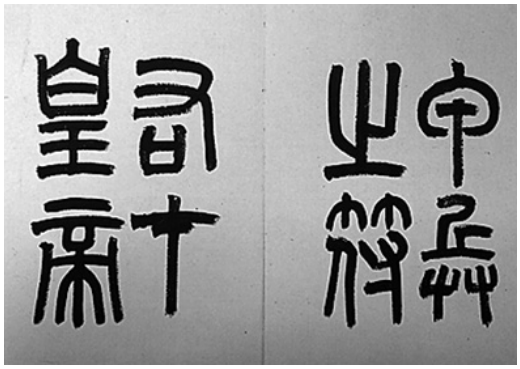
羅氏ニ揮毫ノ礼を述度可然御致声可被下候大喪後ニモナレハ一度出懸候て羅氏ニ面会致度存居候

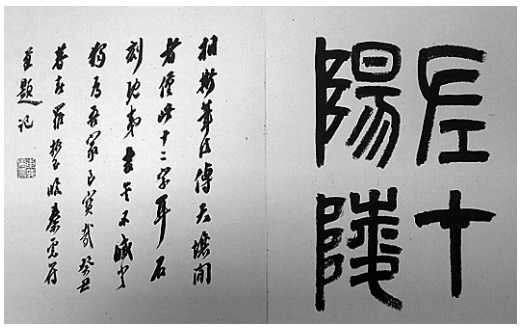
とあり、木堂は、羅振玉に会い、愛蔵品審定および題簽跋文の礼を述べたかったことがわかる。そして、蘭亭会参加のためやって来た京都で、これが実現し、その際、記念揮毫のために用意されたのがこの第一冊であると思われる。

羅振玉は、上引原田悟朗の文中にあるように、辛亥革命後、京都に亡命しており、清朝遺臣の立場をとっていた。よって、木堂は、蘭亭会にちなんだ「蘭亭序」の集字で、なおかつ隠棲する人の存在をいう「山林大有人」を選び、揮毫したのであろう。

② 羅振玉「臨秦虎符」

羅振玉は、字を叔蘊、叔言といい、雪堂と号した。祖籍は浙江上虞、江蘇淮安の人。清末に召され、京師大学堂農科監督などを務めるが、





辛亥革命後、内藤湖南らの勧めで日本に亡命し、帰国後、満州国総理になる。考証学とりわけ金石学に精通し、書画にすぐれた。

これは、秦代に割符として使われていた虎符の銘文を臨書し、併せて題記を認めたものである。

甲兵之符、右才（在）皇帝、左才（在）陽陵。

相斯筆法伝天壌間者、僅此十二字耳。石刻免夷、吉金不滅。登独為吾家至宝哉。癸丑暮春、羅振玉臨秦虎符並題記。

〔甲兵之符、右才（在）皇帝、左才（在）陽陵。

秦の丞相・李斯の筆法で世に伝わるものは、僅かにこの十二字のみである。石刻は損なわれず、吉金は滅ぶことがない。唯一の吾家の至宝としよう。癸丑（一九一三）暮春、羅振玉が秦虎符を臨書し併せて題を記した。〕

羅振玉は、考証学者として、こういった虎符など符牌類の研究にも力を入れており、『増訂歴代符牌図録』などを刊行している。また、この虎符の十二字を書くことも多かったらしく、他に作例も見られる。[4] さらには、木堂に宛てた書簡（犬養木堂記念館蔵「羅振玉書簡」）の便箋は、この虎符の図案が施されたものが用いられている。秦の始皇帝の時、正式書体として小篆を定めた李斯の書法を正統として尊ぶ姿勢は、羅振玉の考証学者としての矜持を示している。木堂にもこの姿勢を伝えるべく、これを揮毫したのであろう。

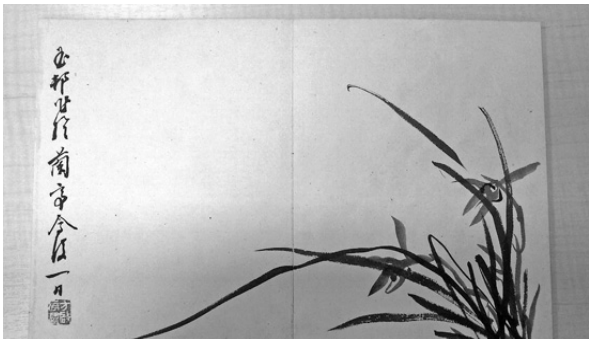
③ 柚木玉邨「墨蘭図」

柚木玉邨は、通称を梶雄、名を方啓、字を子爰といい、玉邨、瓊島仙客、双璧斎主人、小鋤雲館主人と号した。備中玉島の人。画家。東京帝国大学農科大学を卒業後、第八十六国立銀行取締役となる。玉島に来ていた胡鉄梅（一八四八―一八九九）に南画を学び、日本書道作振会展文人画部第一席日東賞を得、泰東書道院審査員、平安書道会審査員などをつとめた。

この「墨蘭図」には、以下の款書が添えられている。

玉邨作於蘭亭会後一日。

〔玉邨が蘭亭会後一日に作った。〕



前述の通り、この款書のおかげで、この書画帖の性質と時期がわかった。おそらくは、蘭亭会後一日つまり一九一三年四月十四日、木堂が羅振玉に会った際、玉郁も陪席していたのであろう。

玉郁は木堂と同じ岡山の出身で、文墨の同道として親交が深かった。玉郁の画集『双璧斎画存』（一九三一、七、一・鳥羽書院）には、呉昌碩（一八四四―一九二七）の封面の後に、木堂が題字を寄せている。

④ 長尾雨山「墨梅図」

長尾雨山は、通称を槙太郎、名を甲、字を子生といい、雨山、石隠、无悶と号した。讃岐高松の人。漢学者。東京大学古典講習科を卒業後、学習院教師、東京美術学校講師、第五高等学校教授、東京高等師範学校教授などを歴任、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無実の罪で東京高師を辞職[5]、上海の商務印書館に勤務した。上海では、劉炳照（一八四七―一九一七）らと詩会を創始し[6]、呉昌碩らと交わって、中国の文墨趣味を身につけた[7]。上海在住足かけ十二年で帰国し、京都に寄寓、平安書道会副会長などをつとめ、在野の学究として尊敬を集めた。

この「墨梅図」には、以下の題詩と款書が余白を埋めるように記されている。

一枝茅屋背、走出断橋西。
臨水清愈徹、倚風亟更芳。
雪消驢影遠、月落角声長。
同調稀脩竹、瘦寒両共忘。
癸丑菊秋、雨山幷題。

〔梅の一枝が茅屋に背き、断橋の西に走り出る。
清らかな水に臨んでますます徹し、疾い風に倚ってさらに芳しい。
雪は消えて驢馬の影は遠くなり、月は落ちて角笛の音が長くひびく。
類稀なる脩竹と同調すれば、痩せも貧しさも共に忘れよう。

大妻女子大学蔵「犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖」について

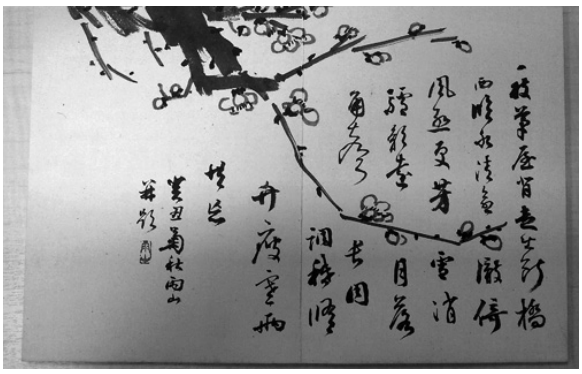
癸丑（一九一三）菊秋（旧暦九月）、雨山が幷せて題した。〕

題詩を読むと、この梅の一枝が雨山自身の自照であることがわかる。第一・二句では、日本に背を向けて西の方中国に来たことをいい、第三・四句では、その中国で成長があったことをいうが、第五・六句では、寂寞の情に駆られることを暗示し、第七・八句では、脩竹のような類稀なる木堂と行動を共にすれば、憂いも消えるという。雨山は、木堂の依頼に応え、画と題詩でもって、自身の胸中を吐露しつつ、木堂への敬慕を表明しているようだ。

款書に「癸丑菊秋」とあり、この画が、蘭亭会後一日つまり一九一三年四月十四日に作られたと思われる①～③から、半年弱後に作られていることがわかる。当時、雨山はまだ上海におり、この画も上海で作られたと思われる。さすれば、木堂がこの書画帖を上海の雨山に送り、揮毫を依頼したことになる。前述のように、一九一二年春に、雨山は自らのもとに持ち込まれた「唐荊川旧蔵宋拓定武本蘭亭序」を木堂に購入してもらっており、このことは、明治四十五（一九一二）年七月三日付雨山宛書簡からも窺える。これをきっかけに、木堂と雨山は、一層の深い親交を有することになったらしい。

上海にいた雨山は、もとより京都の蘭亭会には参加していない。ただ、大正二（一九一三）年四月二十日付『大阪朝日新聞』付録「蘭亭会[8]」には、

在支那の長尾雨山君から出品もあり、（中略）雨山君からは尚非常の好意で彼の蘭亭



に在る王右軍の位牌の摺物並に曲水から汲んだ水を贈られた位で、それを祭典に用ひることの出来たことなどは、昔では想像も及ばぬことである。

とあり、雨山の蘭亭会に対するひとかたならぬ思い入れが窺える。おそらく、木堂は、こういった雨山の想いを汲み取り、蘭亭会後一日に、自らと羅振玉および柚木玉邨と揮毫した書画帖を送り、雨山にも揮毫を求め、そこに加わってもらったのであろう。

そして、おそらくは、次の⑤を作った小栗秋堂が、木堂の意を受けて、この書画帖を上海に持って行ったと思われる。

⑤ 小栗秋堂「墨菊図」

小栗秋堂（生卒年未詳）は、通称を市太郎、名を元直といい、秋堂と号した。その居を蘇竹庵という。大阪の人。画家、収蔵家。上海在住中の長尾雨山と親しく交わり、雨山が主催した大正二（一九一三）年、旧暦の三月三日（新暦四月九日）に蘭亭を訪問した一行に加わっている。秋堂は、この時作った詩を書いた詩箋を添えて、雨山の友人である書家の山本竟山（一八六三―一九三四）に書簡を送り、「主唱者長尾雨山君、会者十人」と記している。[9] また、大正四（一九一五）年四月、自らの居である蘇竹庵に所蔵の書画三十件を展示し、その図録『蘇竹墨縁』（一九一五・平安蘇竹庵）を刊行しており、呉昌碩序、内藤湖南序、長尾雨山序、小栗秋堂小引、木蘇岐山（一八五七―一九一六）跋が附せられている。

この「墨菊図」には、以下のような題字と款書がある。

陶家遺愛

癸丑之秋、蘇道人。

「陶家遺愛」とは、東晋の陶淵明「飲酒其五」の「採菊東籬下」にちなむのであろう。つまり、ここに画かれている菊は、陶淵明の愛した菊である。前出『蘇竹墨縁』小栗秋堂小引に、

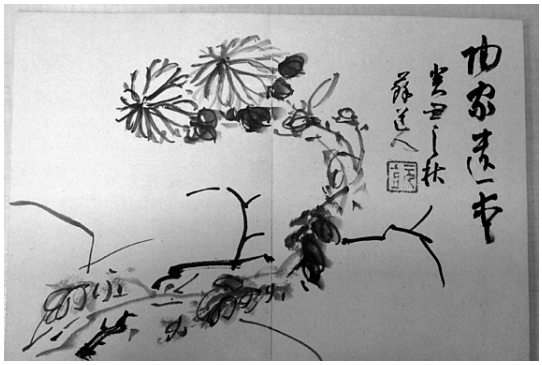
前年癸丑以齢已老、閒居平安、絶意塵事、尚友古人、聊以自適。〔一昨年の癸丑（一九一三）、年もすでに老いたので、平安（京都）に閑居し、俗事に意を絶ち、古人を友とし、なんとか自適の日々を送っている。〕

という一節が見え、この癸丑の年、秋堂は、京都に閑居したという。この心境を陶淵明にかこつけて表しているのであろう。

この『蘇竹墨縁』小栗秋堂小引の冒頭に、秋堂の仕事が窺える一節がある。

明治辛丑以来、予遊支那年一両次、輒捜訪名賢書画、所獲不少、而無力自守、多割帰有力者。

〔明治辛丑（一九〇一）以来、私は年に一、二回中国に遊び、名賢の書画を捜訪し、手に入れたものは少なくなかったが、手中に収めておくだけの力がなく、多くは割愛して有力者に帰した。〕

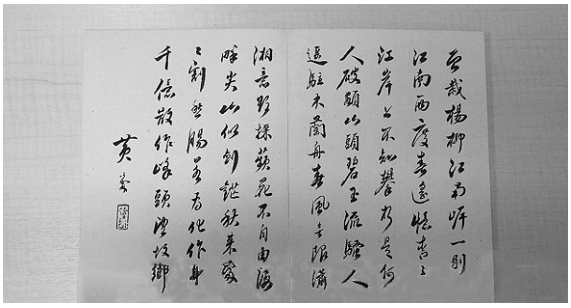


つまり、中国で書画を購入し、日本でそれを売っていたのである。木堂に帰した「唐荊川旧蔵宋拓定武本蘭亭序」を雨山に持ち込んだのも秋堂であったのかもしれない。ともかく、骨董商として、秋堂は日本と中国を行き来しており、木堂の意を受けて、この書画帖を上海に持って行き、雨山に④を作ってもらい、おそらくは雨山に勧められて自らもこの⑤をものしたのであろう。

⑥ 黄以霖「唐詩三首」

黄以霖（一八五六―一九三二）は、字を伯雨という。江蘇宿遷の人。光緒辛卯（一八九一）の挙人。湖北鄖陽知府、候補道、署湖南提学使

兼署布政使などを歴任。張謇らと宿遷に耀徐玻璃廠・永豊麺粉廠を設立。辛亥革命後は上海に遷居し、華洋義賑会を設立、慈善、教育活動に力を尽くした。文は古今に通じ、碑帖書画を好み、自らも筆を揮った。黄以霖は、長尾雨山が帰国後、京都で主催した寿蘇会の際、作られた寄合書画帖である『寿蘇集』（清荒神清澄寺蔵）第二冊の帙題箋と表紙題箋（共に戊午（一九一八）二月）を書き、第九面の揮毫を行っている。[10]



ここには、唐の白居易「憶江柳」詩、唐の柳宗元「酬曹侍御過象県見寄」詩、同じく柳宗元「与浩初上人同看山寄京華親故」詩が行草で書かれている。

曾栽楊柳江南岸、一別江南両度春。
遥憶青々江岸上、不知攀折是何人。
破額山頭碧玉流、騒人遥駐木蘭舟。
春風無限瀟湘意、欲採蘋花不自由。
海畔尖山似剣鋩、秋来処々割愁腸。
若為化作身千億、散作峰頭望故郷。

黄以霖

ここには署名以外の款書がなく、書かれた時期もわからない。ただ、前述のように、黄以霖は、長尾雨山の求めに応じて『寿蘇集』の題箋などを書いており、雨山との関係が深かったことは確かで、上海で雨山に勧められてこれを書いたと思われる。第一冊はこの黄以霖の書で終わる。

二、第二冊（犬養木堂・宗星石・柚木玉邨・山本梅荘・滑川澹如・榊原鐵硯）

① 犬養木堂題字「光焔万丈」

第一冊は、各作品上に落款印が押されており、いわゆる即席揮毫とは思えない。だが、この第二冊は、どの作にも落款印がなく、極めて即興的である。おそらくは、ここに揮毫している六人は、木堂を中心に宴席を共にし、木堂の求めに応じて揮毫したのであろう。

どの作にも記年がないため、はっきりした時期はわからないが、大正六（一九一七）年十一月九日付柚木玉邨宛書簡に、

敬啓友人鐵硯来訪御恵寄の高作山水を展観口を極めて歎賞致候異日小子を介して御目に懸り置き書に関して益を請度希望致候同人ハ十七八日頃京都ニ参り仮寓を求め候筈ニ付若し御入落の御序もあらハ御逢置被下度

という一節があり、この冊の③を作っている柚木玉邨に、⑥を作っている榊原鐵硯を紹介している。さすれば、玉邨と鐵硯が初めて会うのは、この年の「十一月十七八日」（会見が実現していなければそれ以降）のことになり、この冊が六人同席の上で作られたものとすると、この冊もやはりそれ以降のものとなる。また、④を作っている山本梅荘が大正十（一九二一）年二月二十四日に歿しているので、それ以前に作られたものとなる。

ちなみに、大正七（一九一八）年

十二月二十三日付原田庄左衛門宛書簡に、⑤を作っている滑川澹如の催しで、長尾雨山を「玉のや」に招き、榊原鐵硯、黒木欽堂（一八六六―一九二三）、菊池惺堂（一八六七―一九三五）、田辺碧堂（一八六四―一九三一）、山本二峯（一八七〇―一九三七）が来て（宗星石は祖先の追善のため欠席）、「例の如く合作あり欽堂雨山の指頭画もありて甚面白かりし」とある。「例の如く」とあり、この澹如の催しの会はよく行われていたようだ、おそらくは、この第二冊も、このような会で作られたのであろう。

ここには、

光焔万丈。木堂。

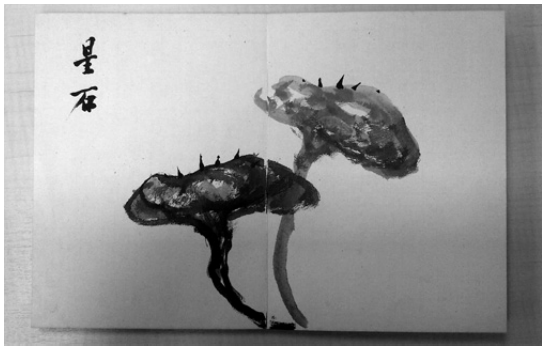
とあるが、この「光焔万丈」は、唐の韓愈「調張籍」詩の冒頭に見える「李杜文章在、光焔万丈長〔李白と杜甫の文学は厳然と存在し、輝く焔は万丈の長さに及んでいる〕」が出典である。ここでは、この書画冊に揮毫する者が、中国の書画文墨趣味を受け継いでいることを言うのであろう。

② 宗星石「霊芝図」

宗星石は、名を重望、字を千里といい、星石と号し、別に白雲産山樵、小雲山房主人、疎雨亭などと号した。対馬藩主、伯爵、貴族院議員。南画家。経学を亀谷省軒、三島中洲、画を大倉雨村に学ぶ。東京南画会・中央南宗画会会長をつとめ、とりわけ山水画にすぐれた。

ここでは、水墨で霊芝を画き、「星石」と署名している。

大正七（一九一八）年七月一日付榊原鐵硯宛書簡に、健筆会展観会で星石の作を見て、「星石の出来不佳」と書いており、同年十一月十日付同じく鐵硯宛書簡に、「高作幷星石画とも四幀昨日小包ニ付置候」とある。また、翌年十一月二十九日付原田庄左衛門宛書簡に、「星石伯之画帖三冊題字幷題詩出来候」とあり、博文堂から出す星石の画帖影印本の題字題詩を書いたことを記している。前述のように、滑川澹如催しの会にも参加していたようで、木堂の文墨の友であったことがわかる。



③ 柚木玉邨「蟾蜍図」

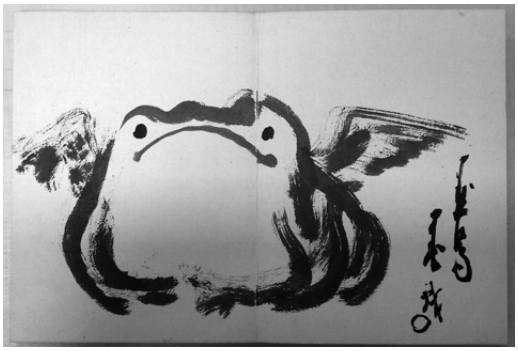
ここには、羽の生えたヒキガエルが画かれており、おそらくは、西王母の秘薬を盗んだ姮娥が月に逃げてヒキガエルになったという『後漢書』に見える故事によるものと思われる。「玉島墨戯」とあり、玉島出身の前出柚木玉邨の作であろう。押印の代わりに「〇」を描いて書き印としている。

④ 山本梅荘「墨竹図」

山本梅荘は、通称を倉蔵、名を駟、字を子埜といい、梅荘と号し、別に半村と号した。尾張半田の人。日本画家。貫名海屋、三谷雪崦に文人画を学び、故郷の半田に戻って、中国の古画を手本とした。山水画、花鳥画にすぐれ、吉嗣拝山（一八四六―一九一五）、児玉果亭（一八四一―一九一三）と共に、地方の三大家と称された。

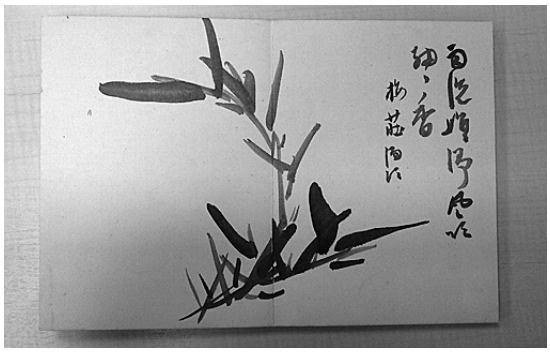
ここには、水墨で竹枝が画かれ、以下の題字と款書がある。

雨洗娟々浄、風吹細々香。梅荘酒頭。



〔雨が洗えばうつくしく清らかになり、風が吹けばわずかに香りたつ。梅荘酒頭。〕

これは、唐の杜甫「厳鄭公宅同詠竹」詩の一節で、竹にちなんでこれを題している。「酒頭」とは、酒を好む愚か者で、だまされてもわからないような人をいう。



⑤ 滑川澹如「倣木堂書」

滑川澹如は、初名を多都二、名を達、字を鞠人といい、その居を多聞室（堂）と称した。千葉の人。書家。三十余歳で渡清し、楊見山、翁叔平、呉大澂、兪曲園、陸廉夫、張子祥、呉昌碩、徐星周、呉石潜らと交わった。詩は宋の蘇軾を崇拝し、蘇字を分解して禾魚艸堂と号した。その書は蘭亭序を習い込んだ端正なもので、伊藤博文の『春畝公詩文録』の浄書などは見事である。

木堂の大正元（一九一二）年十月二十六日付原田庄左衛門宛書簡に、澹如が中国より持ち帰った「定武蘭亭」を見たところ精本で、澹如は、木堂の「定武蘭亭」を第一の唐拓、自らのものを第二の宋拓とし、木堂のものは天下第一であると言ったという。その翌々日の十月二十八日付榊原鐵硯宛書簡にも、このことを記した後、

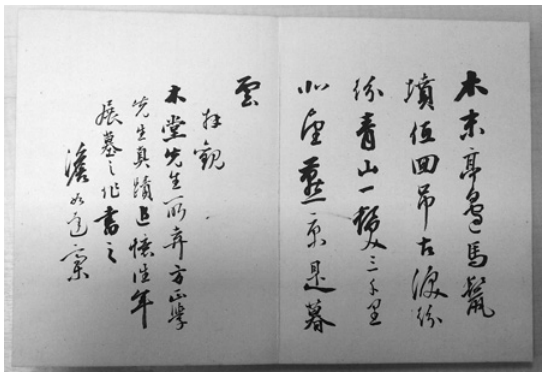
此人ハ雨山ナドノ交友ニテ長く支那ニ参り居り詩書の天狗書ハ各体ニ渉り尤も草書が得意ナレど楷ハ少々俗也東京ニテ書家ノ披露して黒人ニナル筈大抵黙鳳と頡頏スル位ノ者か但当人ハ大天狗にて眼中本ヨリ鳴鶴ナドハナキ也（中略）少シヒマニ相成候ハヽ滑川ヲ招キ書家ノ一会ヲ催すツモリニ付イヅレ其際ハ御出懸可被下此ものハ先ツ書家ノ掘出ノ物也

と記している。どうやら、澹如は、この頃、中国から戻り、東京で書家としてやっていくべく、木堂に後援を求めたらしい。木堂も澹如の書家としての手腕を認め、「滑川ヲ招キ書家ノ一会ヲ催すツモリ」と言っている。これ以降、前述の澹如の催しの会なども行われるようになったのであろう。

ここには、以下のように記されている。

木末亭辺馬鬣墳、低回吊古涙紛紛。
青山一髪三千里、北望燕京是暮雲。

拝観木堂先生所乗方正、学先生真蹟追憶往年展墓之作書之。澹如稾。



〔木末亭の辺りの馬鬣墳に詣り、低回して古を弔えば涙とめどない。

青山を遥かに見れば一本の髪が三千里続くかのようで、北のかた燕京を望めば夕暮れの雲がかかっている。

木堂先生の書法は方正を乗てておられるとお見受けしており、先生の真蹟「追憶往年展墓之作」を学んでこれを書かせていただいた。澹如稿。〕

つまり、澹如は、木堂自作の詩を木堂自身が書いた「追憶往年展墓之作」を木堂の書風を学びつつここに書いているのである。ちなみに、詩中の「木末亭」は、金陵（南京）四十八景の一つで、「馬鬣墳」は、馬のたてがみのように上部が狭くなるよう土を盛る墳墓のことである。

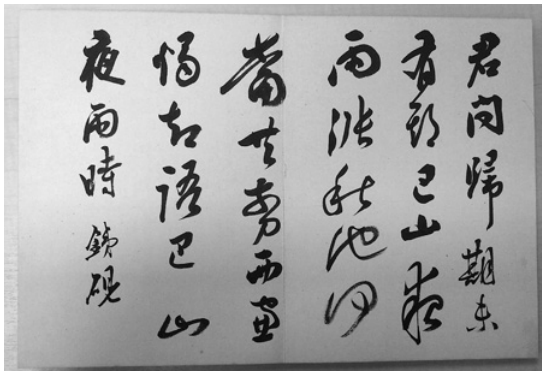
⑥ 榊原鐵硯「唐詩一首」

榊原鐵硯は、名を浩逸といい、鐵硯と号した。和歌山の人。実業家、書画家。岸和田藩士の家に生まれ、慶應義塾に学んだ。帰郷後、藩主岡部長職に選ばれてアメリカに留学し、鉄道営業を研究、ペンシルベニア鉄道等で研修した。帰国後、日本鉄道、総武鉄道、房総鉄道に勤務し、日本の鉄道界に貢献、退職後、岩倉鉄道学校（現岩倉高等学校）の幹事となる。また、房総鉄道在職中より高等商業学校（現一橋大学）講師を務め、その間、中国人留学生に請われて鉄道営業を講じ、さらに張之洞の依頼により青年会館で中国官費留学生に講義し、中国鉄道界に裨益した。晩年は、書画家・刀剣家として活躍し、木堂はその後援を惜しまなかった。

鐵硯の書画集である榊原浩逸著作兼発行『鐵硯道人書画冊』（一九三〇、一一、二四・博文堂／犬養木堂記念館蔵）には、木堂の封面題字、内藤湖南、山本二峯、菊池惺堂、長尾雨山、比田井天来（一八七二―一九三九）の題賛が附されているが、これらも木堂の書画文墨趣味のネットワークに連なる人々によるものである。

明治三十三（一九〇〇）年八月十三日付榊原鐵硯宛書簡に付せられた書簡集編者鷲尾義直の註に、以下のようにある。

榊原氏（名は浩逸、号を以て著はる）は、慶応義塾時代から木堂先生の趣味の友として、交遊も永く、交情も甚だ密であつた、氏はもと日本鉄道の創業に参画して功労のあつた人であるが、寡欲恬淡、



産を治むることに拙な為め、晩年には、米塩の資を丹青に仰いだ。而して木堂先生は、その為めに発起人となつて画会を催し、或は一々其画に賛を施し、或は知人に勧めて之を頒布するなど到らざるなき親切を尽され、晩年大命を拝して組閣勿々、昼夜寸暇無きの間に於てさへ、夜半人静つて後、私かに画賛の筆を揮はれたほどであつた。

氏の家に所蔵せらるゝ書簡約二百通、その十に九迄は風流韻事に関するものである。

鷲尾義直は、木堂の秘書をつとめており、木堂の最も身近にいた人物である。その鷲尾が「約二百通」の書簡の中から、「風流韻事に関する」ものを書簡集に紹介してくれたおかげで、木堂の親友たる書画家・榊原鐵硯の名は世に伝わることになった。

ここには、唐の李商隠「夜雨帰北」詩一首が、行草で書かれている。

君問帰期未有期、巴山夜雨漲秋池。
何当共剪西窓燭、却語巴山夜雨時。

鐵硯

この鐵硯の書をもって第二冊は終わる。鉄硯が最後に来ているのは、この会が鉄硯のために開かれているからであろう。木堂は、実業家出身の鐵硯を自らの書画文墨趣味のネットワークに引き入れることにより、書画家として活躍できるよう配慮しているのである。だからこそ、おそらくは滑川澹如が催す形で会を開き、書画談義を楽しみ、揮毫に興じつつ、親友の鐵硯を推輓したのではなかろうか。

おわりに

この「犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖」は、大妻女子大学図書館に収蔵される際、とりあえず、揮毫している有名人三名の名を冠して付けられた名称である。ただ、これらの書画を有機的に分析してみると、これは、「犬養木堂及其雅友書画帖」、もっとくだいて言うな

ら、「犬養木堂書画文墨趣味ネットワーク書画帖」といったものであることかわかった。この分析を論文にしたのが本稿である。

筆者は以前、拙稿「書画文墨趣味のネットワーク」（二〇一一、一〇、二〇・『アジア遊学』一四六・勉誠出版 所収）の中で、大正八（一九一九）年六月二十一日、京都で行われた羅振玉帰国送別会記念写真に写っている人々を紹介し、そのネットワークの中心的存在であった内藤湖南、長尾雨山、そして犬養木堂の役割の重要性を指摘した。とりわけ、犬養木堂は一流の文墨人士であったが、本業は政治家であり、送別会の主賓である羅振玉に政治談義を持ちかけていたことも紹介した。

このような、文墨人士と政治家を兼ねる木堂は、中国の書画文墨趣味に対する尊重の念を、政治的行動にも反映させていたことが窺え、そのネットワークも、無自覚的にではあろうが、バックアップの役割を果たしていたと思われる。さすれば、木堂の書画文墨趣味ネットワークを研究する意義は、極めて大きなものとなろう。本稿も、その一環を担えたらと思う。

注

（1） この蘭亭会に関しては、陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承――関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に――』（二〇一三、三、三一・関西大学出版部）が、関連資料を網羅的に収めており、参考価値が高い。

（2） 須羽源一「大正癸丑の京都蘭亭会について」（『書論』第三号・一九七三、一一、一・書論編集室 所収）による。なお同文は、注（1）で紹介した陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承――関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に――』に全文再掲載されている。

（3） 拙稿「書画文墨趣味のネットワーク」（二〇一一、一〇、二〇・『アジア遊学』一四六・勉誠出版 所収）参照。

（4） たとえば、『書論』第三十二号「特集羅振玉」（二〇〇一、三、三一・書論編集室）の口絵18には「臨秦虎符十二言扇面立軸」が、劉恒・張本義主編『如松斯盛：首届羅振玉書法書学国際学術研討会論文集』（二〇〇九、一二・北方聯合出版媒体（集団）股份有限公司 万卷出版公司）の口絵には、冊頁に書かれたものが見える。

（5） 長尾雨山と教科書疑獄事件については、樽本照雄『清末小説閑談』（一九八三、九、二〇・法律文化社）、同『初期商務印書館研究 増補版』（二〇〇四、五、一・清末小説研究会）参照。

（6） 拙稿「長尾雨山が上海で参加した詩会について」（『日本中国学会報』第六十六集・二〇一四、一〇、一一・日本中国学会 所収）参照。

（7） 拙稿「長尾雨山と呉昌碩」（『中国文化』第七十二号・二〇一四、六、二八・中国文化学会 所収）参照。

（8） 同注（2）。

（9） この書簡は、注（1）で紹介した陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承――関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に――』に、写真掲載されている。

（10） 柏木知子「富岡鉄斎の見た寿蘇会」（『鉄斎研究』第七二号・二〇〇九、一二、一九・鉄斎美術館 所収）による。なお、同論が掲載されている『鉄斎研究』第七二号には、『寿蘇集』の写真（抄録）と作品解読および内容一覧表が掲載されている。

［附記］ 本稿執筆にあたり、犬養木堂記念館（担当石川由希氏）、大妻女子大学図書館（担当高橋清子氏）、榊原鐵硯令孫・榊原妥氏のご助力を得た。記してお礼申し上げます。